

令和 6 年 5 月 29 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00478

研究課題名(和文)ベルギーの言語芸術における越境性と新たな文化的多層性

研究課題名(英文)Cross-borderness and new cultural multilayers in Belgian language arts

研究代表者

岩本 和子 (Iwamoto, Kazuko)

神戸大学・国際文化学研究所・教授

研究者番号：60203410

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：ベルギー・フランス語文学の越境性・多層性について、国際的・無国籍的に活躍する現代作家(外への越境)と、ベルギーで活躍する移民系作家(外からのベクトル、非母語としてのフランス語文学、トランスナショナル性)に注目し、現代の新たな側面を追求した。移民史、移動文学、越境性や「ベルギー性=belgitude」などの昨今の議論に目配せをしつつ、個々の作家の作品分析を翻訳作業とも合わせて行った。また作家たちの言語芸術とジャンルを超えた芸術活動(舞台芸術や都市空間・移民地区での役割など)を相互に関連させつつ調査・考察を行った。成果は学会・シンポジウムでの発表や複数の著書(編著)の公刊により公表してきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ベルギーは建国当初からすでに文化的多層性を歴史的背景として持っている。芸術作品はその象徴的な表象であり、特にフランス語文学は隣国フランスやオランダ語文学との関係によるアイデンティティ(=ベルギー性belgitude)に関する議論が続いてきた。現在活躍の目覚ましい移民系作家や無国籍的に移動する作家たちのジャンル横断的、脱領域的な活動を、ベルギーのより動的で新たな文化的多層性と捉えるとともに、伝語圏文学で展開している「越境文学」研究に、いまだ未開拓のベルギーからの視点を導入した。またガバナンスや社会統合の議論に留まりがちだったベルギーの移民研究に文化・芸術の創造的側面からのアプローチを行った。

研究成果の概要(英文)：The project sought to explore new aspects of the transnationality and multi-layeredness of Belgian-French literature today, focusing on contemporary writers working internationally and statelessly (crossing over to the outside world) and immigrant writers working in Belgium (vectors from the outside, French literature as a non-native language, transnationality). The analysis of each writer's work was combined with translation work, paying attention to current debates on the history of migration, migration literature, transnationality and "belgitude". We also explored and discussed the interconnectedness of the artists' linguistic work and cross-genre artistic activities (performing arts, role in urban spaces and immigrant neighbourhoods, etc.). The results have been made public through presentations at conferences and symposia and the publication of several books (edited and co-authored).

研究分野：人文学：フランス語圏文学、芸術文化論

キーワード：フランス語文学 ベルギー 言語芸術 移民系作家 越境 文化的多層性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) フランス語圏における「移動文学」研究とベルギーの位置づけ

ベルギーは地理的に小国ながら、文化的多様性を標榜する EU において、その象徴的な国家とも言われ多言語・多文化共存のモデルと見做されてきた。しかし、1830 年の独立以来、フランス語圏 / オランダ語圏、ワロニー / フラウンデン地域や民族の間での「言語戦争」と共に政治体制も芸術文化活動も歩んできた。つまりベルギーは建国以来、ゲルマン / ラテン性(言語、精神性)をすでに内包する越境性・多層性の「特権的な」考察対象となってきた。申請者が研究対象とするフランス語文学に関しては、隣国フランス、特に絶対的中心地パリとの関係を常に意識しながらそのアイデンティティを模索し変遷を遂げてきた。それは自立を前提とする「フランス語によるベルギー文学」か、フランス文学の一部としての「ベルギーのフランス文学」か、という問いに集約されてきた。しかし現在はそのような二項対立的なナショナリズムや領域性を越えて、「フランス語圏文学」あるいは単に「フランス語で書く作家」として国際的に活動する作家が現れている。連邦制の進行とともに国家の存在そのものが揺らいでいるベルギーにあっては、文学研究においてもベルギー性 *belgitude* (ここ) を問うのはもはや時代遅れであるとの立場をとる傾向が強い。しかし逆にそのような無国籍的な「越境する作家」が担う「ベルギー的なもの *belgité*」(どこでも) を改めて問い直そうとする主張も現れてきている。その具体的な対象作家はトゥーサンやノートンといった、ベルギー出身ながら外へ向かう、あるいは行き来する作家たちだと思われる。しかし「越境性」を視野に入れた時、新たに浮上してくるのが移民系すなわち異なる出自や母語を抱える作家や芸術家の存在である。ベルギーは本来多文化主義を尊重する移民大国であり、政治家、学者や芸術家も多く輩出しているが、彼らへの注目度はまだ少ない。昨今、ケベックで発祥した「移動文学」概念が欧州全体へ波及し、パリを中心にその研究が急速に進行し、グローバル化の時代を象徴する一つの文学ジャンルとして定着し影響を及ぼしている。ベルギーのフランス語文学においても、その重要性や文化・社会的影響力は無視できないはずである。本研究では「越境性」に注目して現代作家の動向を見極め作品分析を行うことで、仏語圏文学全体で展開している越境文学研究に、いまだ未開拓のベルギーからの視点を導入することになる。また、しばしば演劇、音楽、映画など多方面で活躍する作家の芸術活動全般を視野に入れ、人文研究では現在不可欠になっているといえる領域横断的な方法論もとりいれることになる。

(2) ベルギー・フランス語文学研究を通して、多言語・多文化共存のベルギー文化の「中心」「周縁」概念とアイデンティティ確立の問題を考察し、芸術・文化の諸相を研究し続けてきた。その中で、2016 年 3 月のテロ事件もあって、新たに移民系作家への関心と、芸術の越境性・多層性の再考の必要性が浮上した。真田桂子との共同研究「ケベック・ベルギー・スイスの仏語圏にみる脱周縁性とトランスナショナルな変容」はフランス語圏文学という大きな枠でこの問題を捉え比較検討する視点と理論を与えてくれた。また本務校の研究拠点形成のメンバーとして移民史を確認し、さらに申請者の主催する「ベルギー研究会」での学際的議論が文学・芸術領域での本テーマの研究の必要性を確信させてくれた。

2. 研究の目的

文化の越境性、新たな多層性へのアプローチ

申請者のこれまでの研究(ベルギー・フランス語文学の、フランスとの関係からみるアイデンティティの歴史の変遷、オランダ語文学との関係、現代ベルギー作家の外向きのベクトルとしての「越境性」、ベルギーの芸術文化活動・文化政策のフランスとの比較、地域比較)を踏まえ、その中の不足要素(必要な作家と作品分析)を補いつつ、さらに、いわゆる移民文学(外からのベクトル、非母語としてのフランス語文学、トランスナショナル性)言語芸術を基盤としてジャンルを越えた芸術活動(舞台芸術や都市空間・移民地区などとの関わり)の 2 つの側面を相互に関連させつつ調査・考察を行う。最終的には前著(『周縁の文学』)の続編あるいは問い直しとして、ベルギー言語芸術を「脱領域的」なものとしてとらえ、その新たな多層性を描き出す。それによって文化の越境性・多層性という現代的な問題への、一アプローチとしての成果を示すことを目的とする。

3. 研究の方法

(1) ベルギー・フランス語文学の「越境性」:「移動文学」概念とともに

従来のベルギー文学における<多層的ナショナリズム>と国際性に対して、移民系作家たちにも注目して創作活動や作品の持つ特徴や意味について調査・分析を行う。その手段として、一つには「移民文学」というある国から別の国への一方向的な移動を前提とした概念にとどまらず、「トランスナショナル=移動」文学の概念を取り入れ、多方向的でより動的な創造性の可能性を想定したい。申請者はすでに、中心(フランス)と差異化すべき周縁性や前衛性、外へと開かれた国際性について追及し、ジャン＝フィリップ・トゥーサン、アメリー・ノートンなどの「外向き」

のベクトルを持ったベルギー現代作家に主に注目し、フランスやイタリアなどからの移民作家を「内向き」のベクトルとして例示し、移動の多方向性の可能性を示していた。本研究では、ノトンやジャン・レイ、マルセル・ティリーといった多層的アイデンティティを体現する現代作家研究に加えて、異文化として「差異化」のより激しいEU域外からのイスラム系作家にも対象を広げその越境性に注目することになる。具体的には現在注目しているトルコ系移民作家クナン・ゴルグンを中心に、数名の作家・芸術家を分析対象とする。

(2) ジャンル横断的な芸術活動全般と、さらに移民地区や都市空間との関わり

分析対象とする多くの移民作家や現代作家が、演劇、映像、音楽など多彩なジャンルにも関わっている。それはブリュッセルと出身地とで活発な文化活動や政治活動を実践している事実からの必要性にもよるが、多様な民族出身者が共生する世界で社会的統合を果たしながら自己のアイデンティティを保持しつつ新たな創造活動を行うためには、芸術と地域環境を結びつける都市-文化全体、即ち社会-文化的観点も必要だと思われるからである。彼らがベルギーの文化的多様性と芸術活動の活性化に深く係っていることを明らかにし、より多層的で動的なベルギーの文化的アイデンティティを新たに呈示し、脱領域的かつ文化的多様性・共存のモデルとしての可能性を示す。

4. 研究成果

(1) 文献資料による作家・作品分析

ベルギーの移民系作家や芸術活動の背景を確認した上で、異文化として「差異化」のより激しいEU域外からのイスラム系作家に特に注目してその越境性に注目した。具体的には現代作家クナン・ゴルグン(1977-)を主な対象とした。トルコ系ベルギー人で、現在活躍中の人気作家であり文学賞も受賞し影響力が強い。期限としての民族意識を持ちトランスナショナルな状況を生きている。初期は「移民作家」のレッテルを避けてあえて自らの起源をテーマにせず「ベルギーのフランス語作家」として執筆していたが、次第に自伝的作品を書くようになり、また父親と逆向きにトルコへの「移民」ともなる。演劇の脚本・出演や映画・テレビドラマのシナリオ制作、メディアでの発言も多く、多ジャンルに跨る活動も行っている。

ベルギーの作家の「外へのベクトル」としての越境性について、アメリー・ノトンにおける内面化された「日本」の意味、フランス/ベルギーを往来し日本を外から眺めるジャン＝フィリップ・トゥーサンとの比較、マルセル・ティリーにおける「ワロニー人」のフランスとベルギーのはざまでの独特なアイデンティティや歴史観について、考察した。

音楽史の中のベルギーの位置づけを、フランスやドイツとの地域的越境、文学・芸術と音楽のジャンルの越境の多角的視点から分析した。

コロナ禍のために現地調査や資料収集が思うに任せなかった2020・2021年度は、移民系芸術家の考察を進めるとともに、特に「外へのベクトル」を意識して、20世紀の作家でフランス語・オランダ語両言語で執筆しギリシャ・ラテン・ゲルマン神話に通じるジャン・レー、SF幻想小説を通してベルギーのアイデンティティを問うたマルセル・ティリー、日本とベルギーの間での自らのアイデンティティを問題化したアメリー・ノトンらの諸作品の邦訳を行った。さらに19世紀ベルギーの国家ナショナリズムと民族・宗教的越境性を併せ持つシャルル・ド・コステルの長編小説の翻訳にも釣込んだ。ベルギー・フランス語共同体学術交流日本担当で京都精華大学客員研究員セリーヌ・マリヤージュ氏との共同研究の一環として、ベルギー・フランス語文学翻訳プロジェクトを企画し、現代作家の翻訳出版に向けてのネットワークづくりやワークショップを行った。

(2) 現地調査、作家・芸術家・研究者との議論

ブリュッセルの移民系住民の集住地区を複数回にわたって地区在住者の案内により現地調査した。具体的にはブリュッセルのモロッコ系住民の多いモーレンパーク地区、トルコ系の多いサン・ジョッス地区、コンゴ出身者など黒人系の多いマトンゲなどである。またかつてヨーロッパからアメリカ大陸に渡る移民の出発港であったアントウェルペンの移民資料館などでの資料収集も行った。

本科研代表者が主催するベルギー研究会を年4回(東京、関西、地方、ブリュッセル)で開催し、研究発表や発表聴取、意見交換を行った。毎年3月にブリュッセルで開催する国際大会ではブリュッセル自由大学、ヘント大学、リエージュ大学、ルーヴェン大学の研究者や音楽、美術、演劇のアーティストとの意見交換も行った。日本ベルギー学会(年2回)においてもベルギーをフィールドとする諸分野の研究者の発表を聴取、意見交換を行った。

2016年の日本・ベルギー修好150周年に始めた「ベルギー学」シンポジウムの企画・運営・研究発表を本科研費期間には3回行った。第2回「ベルギー学」シンポジウム「交流のいま」(2018年12月)第3回「ベルギー学」シンポジウム「日本とベルギー：交流の歴史」(2021年12月)では日白交流をテーマとしたパネルディスカッションの企画・司会を務めた。第4回「ベルギー学」シンポジウム「響き合うベルギーと日本：ベルギーの音楽をめぐる学際的研究」(2023年12月)ではパネリストとしてベルギー独立の契機となりベルギー人アイデンティティの一要素ともなっている、王立モネ劇場でのオペラ上演の実態と意味についての研究発表を行った。

日本音楽学会主催のシンポジウム「周縁か中心か？ 音楽史の中のベルギー」に講演者として2回招聘され、音楽学の専門家と意見交換を行った。

コロナ禍の時期には、ベルギーの協定大学とのオンライン合同セミナーを行い、その際に芸術活動、都市計画・文化政策などの現況に関して研究者との情報共有、意見交換を行った。京都精華大学客員研究員セリーヌ・マリヤージュ氏による講演会(主にオンライン)を2019-2021年度に計8回行い、ベルギーの作家、映画、BDなどについての意見交換を行った。

ベルギー・フランス語共同体政府の招聘でベルギーのフランス語文学作品(シャルル・ド・コステル『ウーレンシュピーゲル伝説』)の翻訳のために3週間スネッフ城に滞在し、各国からの翻訳者・ベルギー人作家十数人との共同生活で、文学に関する現況や諸問題の議論を日々行った。

シャルル・ド・コステル研究の第一人者であるリエージュ大学名誉教授クリンケンベルク氏に、リエージュ大学および来日時京都にて作家の最新研究動向の確認や邦訳への助言を受けた。

(3) 成果のレビューと公表

ケナン・ゴルグンのフランス語作家としてのアイデンティティや期限としての民族意識、トランスナショナルな状況を明らかにして論文にまとめ、本科研代表者が編者となりベルギーの移民と文化的多層性に関する領域横断的な共著『ベルギーの「移民」社会と文化 新たな文化的多層性へ向けて』を出版した。

ベルギーの移民と文化政策についての考察をまとめ紀要論文として発表した。

ジャン・レーの長編小説『マルペルチュイ』の翻訳を含め、同作家のフランス語短編、オランダ語の短篇を文学研究者たちの協力で1冊にまとめ、多言語かつゲルマン的幻想性も有するベルギー人作家として出版した。マルセル・ティリーのSF的幻想小説『時間への王手[チェック]』を翻訳し、作家の多層的アイデンティティやテキストに描かれたベルギー諸都市の象徴的意味などについての論文も発表した。

アメリー・ノトンの越境性について論文にまとめ、共編著『日本とベルギー：交流の歴史』として出版した。

(4) 成果の国内外における位置づけ、今後の展望

日本では未開拓分野であった、ベルギー・フランス語文学の独自性の探求や、越境性や文化的多層性を特色とする現代作家および移民系作家たちの紹介や具体的な作品分析研究は、研究会や学会、シンポジウム、書籍出版などを通して関心を得られた。ベルギーにおいても「ベルギー性」に関する議論は活発に続いており、最新の研究動向と連動する研究として位置付けられる。本科研費研究で得た知見をもとに、日本でのベルギー文学研究・翻訳発展を目指しすべく新たなワーキンググループを立ち上げたが、これはベルギー・フランス語共同体政府の支援を得て、今後ブリュッセルの学术交流部門との連携によって活動を展開する予定である。またベルギー研究会、ベルギー学会、「ベルギー学」シンポジウムも継続し、言語芸術と他分野とを繋げる学際的研究によって、文化的多層性、共存についての考察をいっそう深めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 岩本和子	4. 巻 33
2. 論文標題 ベルギーの「移民」と文化的多層性 –フランス語の移民系作家を例に–	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日仏社会学会年報	6. 最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本和子	4. 巻 126
2. 論文標題 マルセル・ティリー『時間への王手(チェック)』における「灯台の三本の光」の表象	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 近代（神戸大学近代発行会）	6. 最初と最後の頁 49-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本和子	4. 巻 56
2. 論文標題 ジャン・レー『マルベルチュイ』における都市と神話 ベルギー幻想小説とパラレルワールド	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際文化学研究(神戸大学国際文化学研究科紀要)	6. 最初と最後の頁 51-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩本和子	4. 巻 123
2. 論文標題 ジャン・レー『マルベルチュイ』論 語り手の多層性と幻想性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代（神戸大学近代発行会）	6. 最初と最後の頁 59-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩本和子	4. 巻 62
2. 論文標題 (書評) 三田順著『想像された「北方」－象徴主義におけるベルギーの地詩学を巡って』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比較文学 z (日本比較文学会)	6. 最初と最後の頁 110-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazuko IWAMOTO	4. 巻 50
2. 論文標題 Immigrants and Cultural Policy in Belgium	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際文化学研究 (神戸大学大学院国際文化楽句研究科紀要)	6. 最初と最後の頁 31-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計12件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 岩本和子
2. 発表標題 アメリー・ノトンと日本
3. 学会等名 ルーヴェン大学 (KULeuven) 人文学部大学院日本学科 (招待講演) (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩本和子
2. 発表標題 ジャン・レー『マルペルチュイ』をめぐる都市と神話について
3. 学会等名 ベルギー研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩本和子
2. 発表標題 ベルギーの「移民」と文化的多層性 フランス語の移民系作家を例に
3. 学会等名 日仏社会学会シンポジウム「フランス語圏域 (Sphere francophone) における移民の比較 「統合」の論理を超えて」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩本和子
2. 発表標題 ベルギーにおける移民をめぐる事象と多文化共存
3. 学会等名 東京学芸大学 ISSUPプログラム ベルギーからみる「多文化」 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩本和子
2. 発表標題 ケナン・ゴルグンKenen Gorgunの表象における多層的アイデンティティと当事者性
3. 学会等名 ベルギー研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩本和子
2. 発表標題 ベルギー王室の歴史とイメージ
3. 学会等名 Zonta International :Zonta Club o Osaka II 第283回例会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩本和子
2. 発表標題 マーテルランク『ペレアスとメリザンド』のゲルマン性
3. 学会等名 2019年度日本音楽学会支部横断企画シンポジウム「周縁か中心か？－音楽史の中のベルギー：第1回 ベルギーとヴァグネリスム[1870年－]（招待講演）」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩本和子
2. 発表標題 1830年ベルギー独立とモネ劇場
3. 学会等名 2019年度日本音楽学会支部横断企画シンポジウム「周縁か中心か？－音楽史の中のベルギー：第2回 ロマン主義とフェティス[1830-70年]（招待講演）」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩本和子
2. 発表標題 「ベルギー国歌」は誰が歌う？
3. 学会等名 シャンソン研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩本和子
2. 発表標題 ベルギー王室の歴史とイメージを辿る
3. 学会等名 神戸大学ジャンモネCoEワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩本和子
2. 発表標題 変容することばたち：ベルギー
3. 学会等名 欧州連合（EU）による文芸交流プロジェクト「ああいう、交遊、EU文学」発足記念イベント（招待講演）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩本和子
2. 発表標題 F.-J. フェティスを読み、そして聴く 歴史・地理社会の点からもたらされる普遍への視野
3. 学会等名 第4回「ベルギー学」シンポジウム「響きあうベルギーと日本ーベルギーの音楽をめぐる学際的研究」（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 岩本和子 訳	4. 発行年 2023年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 270
3. 書名 時間への王手[チェック]（マルセル・ティリー著）	

1. 著者名 岩本和子・井内千紗他訳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 527
3. 書名 マルペルチュイ：ジャン・レー/ジョン・フランダース怪奇幻想作品集	

1. 著者名 岩本和子・井内千紗編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 311
3. 書名 ベルギーの 移民 社会と文化ー新たな文化的多層性に向けてー	

1. 著者名 定延利之編（共著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 469
3. 書名 限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究	

1. 著者名 岩本和子・中條健志編著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 302
3. 書名 日本とベルギー：交流の歴史と文化	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計5件

国際研究集会 第93回ベルギー研究会ブリュッセル大会	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 第3回ベルギー学シンポジウム 日本とベルギーの交流史	開催年 2021年～2021年

国際研究集会 ベルギー研究会ブリュッセル大会	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 第4回「ベルギー学」シンポジウム「響きあうベルギーと日本：ベルギーの音楽をめぐる学 際的研究」	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 第97回ベルギー研究会ブリュッセル大会	開催年 2024年～2024年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ベルギー	Wallonie Bruxelles Internationale (WBI)		